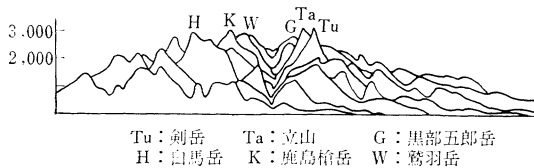


## 黒四を現地にみる

最初にして最後の難工事といわれた関西電力「黒部川第四発電所」を霧雨にけむる6月6日、現地にみる事ができた。日本電力以来、多くの土木技術者の悲願であった黒四ダムへの道程はここに幾多の苦難の道を経てみごとに結実したわけである。この秘境といわれた日本アルプスの山中にモーニングに身をつつみ、その歓びをしっかりと味わっているかのように見える野瀬正儀所長以下工事関係者には、勝利の美酒に酔う美しき武者の風情がみられるようであった。

いわゆる日本アルプス 3000 m 級の高峰が 50 数座もあるその中で、立山山脈と後立山山脈は他を圧する長大な山脈でありその山脈を貫ぬいて流れるのが、黒部川である。この山脈の特長は下流へゆくにしたがって山が高くなることと、これに起因して下流へゆくにつれて谷も



また深く急であることである。

黒部はその占める全域が国立公園で広さは 7 万 ha といわれ、その広大な原生林はまた国有林である。黒部川は全体的に直線状であるが細かくみると曲折は美しくはなはだしい。これはこの峡谷を構成するカコウ岩あるいはカコウ閃緑岩の節理とこれに密接に関連し河道を直角または斜めに横切る断層および、それにそう脈岩に制約されていることによる（深井三郎：現代登山全集「立山・剣・黒部の地形」の資料による）。

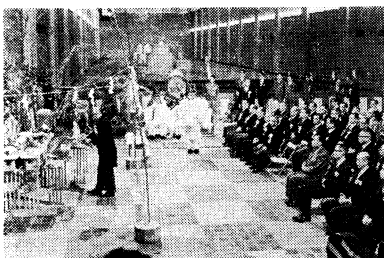
このあまりにも大きく、かつ変化にとんだ自然を相手として選んだ明治の先輩の英断、それはそのまま大正、昭和の後輩にうけつがれ黒四への長い道のりをありみつ

づけることになる。

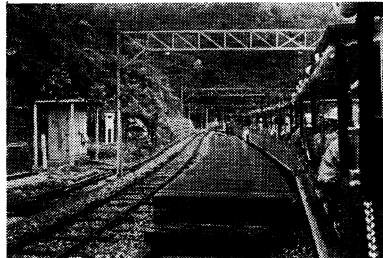
われわれは6月4日夜半、関西電力専用列車で上野をたち、翌日、地下発電所で挙行された修ばつ式(不参加)について富山市体育館で盛大に行なわれた祝賀式に参列した。黒四直接の生みの親ともいえる太田垣士郎関西電力KK会長の挨拶に始まり、ついで野瀬取締役黒四建設所長の工事報告、来賓祝詞とつづき天皇陛下よりたまわった銀盃が太田垣会長以下歴代所長整列して披露され、池田総理からの祝電とつづき祝宴に入った。宇奈月温泉に一泊、6日早朝より黒四に出かける。綿密に組まれた見学スケジュールはみごとであり、案内者各位も親切で申し分なく気持ちよくみせていただく。

降雪時のため設置されたと聞く人道トンネルと並行してはしる黒部鉄道に乗る。20.2 km のこの電車は資材輸送に大きく活躍したと聞く。要本、柳河、黒二、をみて今秋完成を目標に施工中の新黒部川第三発電所へ出る。高さ 200 m の山中をくりぬいたエレベーターに分乗、上部軌道へと乗りつづ、この上部軌道は 60°C になる高熱地帯を通過するために密閉式となっており、一見国鉄の有かい貨車を連想する。そして 6 km のトンネルを通り戸が開けられたところが全地下式の黒部川第四発電所の入口である。そのデザイン、設備は何とトイレットに至るまで東京の最新式ビルと同様でアルプスの山腹にいることを一瞬忘れさせるほどだった。後刻聞いた話だが黒四の一つ下の仙人谷ダムですら職員が来たがらないのに、ましてこれより一段と奥でなお地下生活を押しつけるためには相当条件をよくしないと逃げられてしまうということで、オール エア コンディショニングを実施したそうである。事前に写真などでおおよその様子は知っていたので発電機室自体には驚きは小さかったが水車室はその異様とも思える回転音と振動をして現代のモンスターであり、これをダム地点とあわせ 10 数人で制御していると聞くと科学の進展は人間を近い将来不必要とするところまですすめるのではないかと小さな戦りつを覚えた。担当係員に混って説明しながら歩をすすめる野瀬所長、吉田関電建設部長など関係者の眼には、この地下発電所の生みの親としての愛情あふれるまなざしが感じ

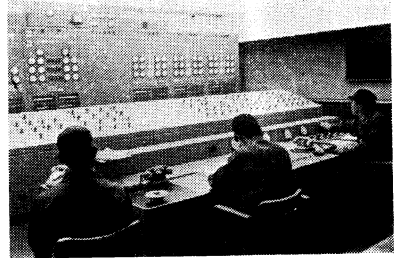
①



②



③



られる。変電所はインクラインをはきんで発電所と反対側にあり、この開閉器、変圧器の一群は空想科学物語のなかに出てくる世界に迷い込んだような錯覚を起こさせる。地下にあるためか方向感が皆無であることとともに比較対照物がないために「丸ビル」相当の大きさとその規模を説明されても直感的に納得がいかない。本誌4月号座談会でご出席の方々が語られていた難工事のひとつにインクラインがある。そこをケーブルは静かに昇ぼる。45°の急傾斜をゆくとき窓外に流れる岩肌はつめたく美しくひかり、ここに数カ月前まで鼓動した工事のつち音を、忘れ去ったかのようなのである。多くの山男たちの命を奪い、征服をこぼんできたアルプスの壁、その岩肌は平均4°Cといわれる地下水を含み冷ややかにわれわれを迎える。

インクラインからバスに乗り継ぎ、初めてアルプスの谷間へ出る。ここ数日その姿を自然の中に沈めて顔を見せなかった立山が、雨天にもかかわらず奇蹟的に、はつきりその雄姿をあらわしてくれた。

ついにダムの上に立つ。とうとうやったなという実感がしじみ湧き上がる。168名の貴重な人柱をのみ、500余億円のコネを吸いこんだ巨大な構造物は、荘厳な峰々の影をやどした黒部湖をしっかりと抱きこんで、白くどっしりと立ち上がっている。自然との融合に満足の色さえ浮かべながら、それは岩盤に深くくい入っていた。黒部の岩、それは今回の工事でもっとも泣かされたものひとつであったと聞く。中央部アーチ、両サイドに重力ダムを付加した苦心の設計は、世界第4位の高さを誇り、その放水は周囲の山々に呼動して霧を生み調のとれた画面をひきしめる。ダムの天端は完全に舗装された2車線の道路をゆくような感じ、その一隅に本年度朝日文化賞受賞に際し贈られた賞牌がおかれていた。「6年有余にわたり、独創的な工法と機械力を駆使し、巨大なドーム型アーチダムと技術史上画期的ともいえる地下大発電所を完成されました。特に黒部峡谷の自然美を守るため発電所を地下に埋められたことは日本の技術の偉大さを示すとともに電源開発のあり方に貴重な教訓を残されたものと信じます。ここにこの業績を讃え朝日賞規定により本賞を贈ります」と記され贈られたこの記念牌は、雨

にうたれて黒部の峡谷をみおろしていた。大町郵便局黒部ダム特設局で記念スタンプをおしていただき、用意されたバスに分乗大町ルートの特設トンネルへ入る。ちょうど中間点ぐらいのところに、あまりにも有名な「破砕帯」がある。グリーンランプがあることと特別に巻きたてがしてあることで確認できるが、よく注意してみないと気づかないくらい現在は安定しており、ここが本工事をして中止との噂まで生んだところかと車窓にながれ去る破砕帯に一時ではあるがとまどう。トンネルの右側に長大コンベアーをみて、そしてその量の多いことで知られた地下水の中をバスは進む。

人はこの黒四をさして「現代の万里の長城」という。「山がそこにあるからその山にのぼる」。そこに天下に知られた優秀な電源地帯があったから黒四をつくった。それでよいのではなからうか。生きて、努力して、苦しんで、ここに結実したものであるならそれは美しい。想像を絶する苦難にあって向上を目標に身をけづられた、そして天に召された友人達にききえられたこの昭和の芸術作品、この黒四こそわれわれが後世に誇りをもって語ることでできる得難いものであろう。近い将来、黒四は電力供給源の王座をおりる宿命をもって生まれいであるかもしれない。いや、すでにそのプロローグは始まっている。しかしここに集結されたところの人智は比較することのできない宝石であり今後に生かされるものと信ずる。そして土木日本の名声を永遠に全世界に示しうるものであろう。

黒四に栄光あれ。そしてここに新しく生まれた景観、また幾多の失われた人々の御霊に幸あれと祈る。

【編集部】

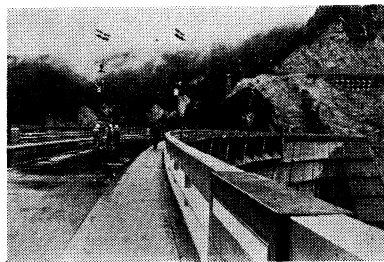
【写真説明】

- ①地下発電所で行なわれた修ぼつ式（関西電力KK提供）
- ②宇奈月～新黒三を結ぶ黒部鉄道、飾りつけが美しい
- ③地下発電所主調整室、正副2名が任務にあたる
- ④アルプス山中に出現した黒部湖
- ⑤ダム天端をあるく招待客
- ⑥関電トンネルをゆく関電貸切バス

④



⑤



⑥

